まぼろしの有田焼
～トシカネジュエリー～

ブローチ

パンフレット

もうすぐ創業 400 年を迎える有田焼の歴史の中で、つい最近のことながら有田の人々の記憶から消えつつあるのが、トシカネジュエリーの存在ではないでしょうか。

筆者も数年前、有田町役場の広報担当者から「トシカネジュエリーがアメリカのオークションなどで出ているそうだが、これって有田焼？」という問い合わせがあって初めてその存在を知った次第です。

それは第二次世界大戦後、GHQ 相手に爆発的に売れた装飾品（ブローチやカフスボタンなど）のことでした。「有田町史　陶業編Ⅱ」には戦後の復興に際し、規格の厳しいセット物から転じて、花瓶や室内装飾品など美術品の単一物に依存しようという傾向が見られ、有田焼の復興の一翼を担ったとあります。昭和 22 年 8 月 15 日の民間貿易再開後、翌 23 年 6 月末日現在における有田地方の陶磁器の輸出状況を示す資料が残っていますが、その中で小島俊一さんがブローチ 1200 個を GHQ 中央購買部に納品しています。

この小島俊一さんは有田町白川の出身で、元々深川製磁で働いていました。そのころの社長は深川忠次さんで、妻のモトさんとの二人三脚で多くの若手を育てたそうです。その薫陶を受けたのが小島俊一さんで、その後、昭和 6 年に独立し、共に組んだのが冨右衛門窯で働いていた南兼蔵さん（波佐見町出身）でした。南さんはとても手先が器用で、絵も上手かったそうです。「トシカネ」というブランド名は二人の名前から由来しています。

二人は戦前から帯留め作りを手掛けていました。その後、帯留めは贅沢だという時代になり、在郷軍人の徽章作りにかわり、有田にいては技が盗まれるのではないかと危惧し、昭和 10 ～ 14 年ごろに佐賀市多布施に工場を移転。

当時、成形を担当していた佐賀市在住の鈴山光吉さん（84 歳）に伺った話では、工場に美術研究所を併設し、彫刻や絵具などの研究に取り組みながら製造を行っていたそうです。

終戦後は前記のように進駐軍向けのアクセサリー製造へと転換していきました。カフスボタンやタイピンなどのほかに、七福神が付いたスプーンや、日本の寺院や狛犬を描いたり形作ったりしたイヤリング、ブローチなど、どれも細工や模様の描き方が細かく見事です。特に日本的なデザインは欧米人に好まれ、多い時は 50 ～ 60 人の従業員が働き、年間数万個の注文があっていたとのことです。

七福神

ひと時代を風靡したトシカネジュエリーは、工場自体は昭和 50 年ごろまで稼働していたそうです。その後、1985（昭和 60）年のプラザ合意でドルが急速に下落したことが命取りとなって、アメリカへの輸出が完全にストップしました。

細工の精巧さや日本的なデザインを持った有田焼の宝石は、時代や人々の好みが変わって行く中、次第に姿を消していきました。

（尾﨑葉子）

季刊 皿山 No.101 春 2014
有田町歴史民俗資料館・館報

古老に昔話を聞く会

今年度より、地区の古老に集まっていただき、昔のこと（道や地区の呼称、仕事の事、暮しぶりのことなど）を語ってもらう、「古老に昔話を聞く会」を開催しています。今まで取り上げられることのなかった事柄が忘れられてしまう前に再認識し、改めて地域の歴史、文化を捉えていこうという試みです。今年度は平成25年5月22日、6月25日の2回行いました。

第1回目は、やはり有田焼の原点と言うことで、泉山磁石場（石場）のことを、採石に携わっていた山内町在住の迎隆さん（80）、山口徳馬さん（80）に語っていただきました。

お二人は昭和35、6年から平成5年に石場での採石が終了するまで勤務されており、その当時の勤務形態や給与、採石の方法、また使っていた道具の名前や使い方、さらに昭和40年から始まった天狗谷窯跡の発掘についてのことなど、様々な話を伺うことができました。

2回目は、有田町在住の松枝初子さん（89）、永渕操さん（81）に、有田の戦前・戦中・戦後の暮らしについて、様々な事柄を語っていただきました。この時は久富桃太郎さんのご厚意により、会場として中の原の「ギャラリー小さな展示室」をお借りして、またオブザーバーとして教育委員の照井一玄さんも同席されました。お二人には家庭の主婦の仕事や家業（赤絵屋）のこと、町にあったお店、子どものころのお菓子・おもちゃ、小学校、女学校などの学生時代、戦中の生活、年中行事やお祭りのこと、その他あらゆることについて話を聞かせて頂きました。

2回ともれきみん応援団の団員も話の聞き手として、また映像の撮影者として参加しました。この記録はＤＶＤに保存し、映像資料として残していきます。来年度以降もまた別のテーマで「古老に昔話を聞く会」を開催したいと思います。（永井都）

写真を見ながら話をされる迎さん（左）、山口さん（右）

話をされる松枝さん（左）と永淵さん（右）、写真奥は記録を取っている応援団の団員

応援団の一年

今年度から発足した『ありた　れきみん　応援団』の活動が、まもなく1年を迎えます。人員的にも予算的にも厳しい文化財行政の中で、展示解説や企画展の設営など、資料館への人的支援を行うことを目的に結成されたこの組織ですが、1年が経過して、なんとのべ45件の支援を行って下さいました。

具体的には、①「古老に昔話を聞く会」への協力、及び撮影　②生涯学習課と共催している「ふるさと再発見講座」でのＤＶＤ撮影　③夏休み子ども向け講座「歴史の川ざらい」「山辺田遺跡発掘体験」「町屋模型作り教室」での補助　④団体見学者への展示解説　⑤企画展の展示設営・撤去及び関連行事の補助　⑥遺跡説明会や文化財防火デーといった、文化財課主催行事の補助などですが、これ以外にも様々な支援を行って下さいました。

発足したばかりで、どのように活動を行うべきか手探りの状態でしたが、団員の皆さんの協力と熱意によってたくさんの事業を行うことができました。改めて感謝申し上げます。

応援団の任期は1年ですが、引き続きご協力いただける方は、更新することも可能です。これからも応援団の皆さんと一緒に、有田の歴史を守り、伝え、繋げる活動をしていきたいと思います。（永井都）

応援団活動風景（紅葉ライトアップ時の碗灯設置の様子）

襲　名
～十五代酒井田柿右衛門さん～

十五代酒井田柿右衛門さん

昨年亡くなった先代酒井田柿右衛門さんの跡を継いで、平成 26 年 2 月 4 日、子息の浩さん（45 歳）が十五代柿右衛門を襲名されました。柿右衛門窯や国の重要無形文化財保持団体の代表者としても、名実ともに引き継いでいかれることになります。

一つの家で、それも同じ家業を長年にわたり継いでいくことは並大抵のものではないと思います。酒井田家は江戸時代初期、正保 4 年（1647）ごろに、初代柿右衛門（当時喜三右衛門）が赤絵付けの技法を確立したといわれ、その後、現在まで続いている窯元ですが、酒井田家に残る文書には興国院（鍋島家初代勝茂の嫡子）の側近くに仕え、その逝去（寛永 12 年・1635）後に有田に移り、窯焼きとなったことが記されています。その謂れもあって藩主が代替わりした折には、代々の主君に御目見えするという家柄でした。

また、先頃発見された皿山代官成富作兵衛の私的な日記には、柿右衛門窯への注文に対して、佐賀の御進物方へ製品の送付の様子や代銀支払いのことが記されています。これに対して、酒井田家文書にも「文化 3 年（1806）御用注文帳」が所蔵されていて、こちらには同じ注文を更に詳しく、文様や形などを記しています。記録からは江戸時代から佐賀藩主や長崎奉行などからの注文に応じた様子がわかります。

色絵蜂巣形香合
（昭和 16 年ごろの“マルギ”製品　日本陶業連盟蔵）

近年になって大正 6 年（1917）、今から 100 年ほど前に十一代柿右衛門さんが亡くなり、当時 38 歳の正次さんが十二代柿右衛門を襲名されました。しかし、時代は第一次世界大戦の真っただ中で、次第に世情は不安定となっていきました。当時のことを後に十二代は次のように語っています。

「大正の頃は金（カネ）の値打ちが高くなったり、急に低くなったりしたのでずいぶんと戸（と）まどいました。私も経営の面で行きづまりいらぬ苦労を背負って出来た品物もよくなかった。（中略）あのころは家も傾きいっそのこと転業しようかとも思ったほどだ」

初代が確立した赤絵付けの技法も、その史実を伝える赤絵始まりの「覚」では一言も触れていませんが、そこには言葉にならない苦労が隠されていると思いますし、さらには度重なる「焼物不景気打続」、「諸色高価に相成、日増零落に及」ぶなど、窯を取り巻く環境も一様ではなく、また戦時中の技術保存の措置（所謂、マルギ製品）を経て、昭和 28 年には柿右衛門三百年祭を迎えました。同年、江戸時代に確立されながら、それまで途絶えていた「濁手」技法を、十二代と渋雄さんが再現することに成功し、同 51 年に柿右衛門製陶技術保存会の「濁手」技法が重要無形文化財保持団体に指定されました。

昭和 38 年に十二代が逝去。渋雄さんが 56 歳で十三代を襲名し、同 57 年十三代が 75 歳で逝去後、48 歳の正さんが十四代を襲名しました。生前の十四代は聞き書きの中で伝統を繋ぐことについて次のように語っていました。

「先代たちがこうして書き残したいろいろなことを繋いでいくということは言うまでもありませんが、文字とか記録とかにはなっていないと言いますか、ならないと言いますか、そういうなにかを全部つぎの世代に引き継いでいくこと」

昭和 28 年柿右衛門三百年祭の折の揮毫皿

文化財防火デー

1月26日（日）は、文化財防火デーでした。有田町でも、この日に合わせて、事前に町内には回覧や防災無線で参加の呼びかけを行い、今年は有田町歴史民俗資料館西館で、消火訓練等を実施しました。

10時ちょうどに資料館西館の玄関付近でモクモクと発煙筒の煙が立ち上がり、消防署に119番通報。近くに待機していた消防車が、サイレンを鳴らしながら駆けつけました。そして、発煙筒の煙が付近に充満する中、消防車から伸ばされた消火ホースで、消防署職員により本番さながらに放水が行われました。10分ほどで鎮火。

消火訓練のあとには、引き続き、消火器の取り扱い訓練を実施しました。消防署により、消火薬剤の代わりに水を充填した消火器と放水用の的が準備され、取り扱い方法の説明後、実際に参加者の方々に消火器の使い方を実習していただきました。家に消火器は備え付けられていても、なかなか使い方を練習する機会はないので、いざという時に備えて、良い機会ではなかったかと思います。

その後は、資料館西館の展示見学を行いました。資料館の東館は常時開館していますが、西館は事前の予約によってそのつど開館するようになっています。そのため、個人ではなかなか見学の機会もありませんが、ひと昔前の生活用具や農耕具などがずらっと並んでいます。年配の方々には、懐かしいものも多く、今回も見学中にあちこちで昔話に花が咲いていました。

文化財防火デーでの消火訓練の様子

開催しました!! 町屋で昔話を聞く会

2月15日（土）に、有田町生涯学習課と共催で「町屋で昔話を聞く会」を開催しました。これは平成17年から始めたもので、毎回、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された「有田内山」の町並みの古い町屋をお借りし、昔話や絵本などを子どもたちに聞いてもらって、有田の歴史を体感してもらおうということで開催しています。

今年は大樽地区にある大正期の代表的な町屋で、昨年築100年を迎えた手塚家の座敷をお借りし、子どもたちや保護者の方たちと一緒に、読み聞かせのボランティア・ひこうせんの方々にお話をしていただきました。

今回は、有田町の「黒髪山の大蛇伝説」の紙芝居を、有田中学校図書館司書の田中浩子さんと協力者の古部直美さんに制作していただき、そのお披露目でもありました。映像を使っていた前回までとは違い、25枚の紙芝居は絵の表情も豊かで子どもたちにも好評でした。

話を聞く子どもたち

手塚家には玄関わきに古い時代のものから現代までのお雛様も飾り付けられていて、楽しいひとときを過ごすことができました。

「黒髪山の大蛇伝説」の紙芝居

季　刊　『皿　山』

通巻101号（平成26年3月1日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185
URL：http://rekishi.town.arita.saga.jp